

木沢村の民家

----- 民家班（日本建築学会四国支部徳島支所） -----

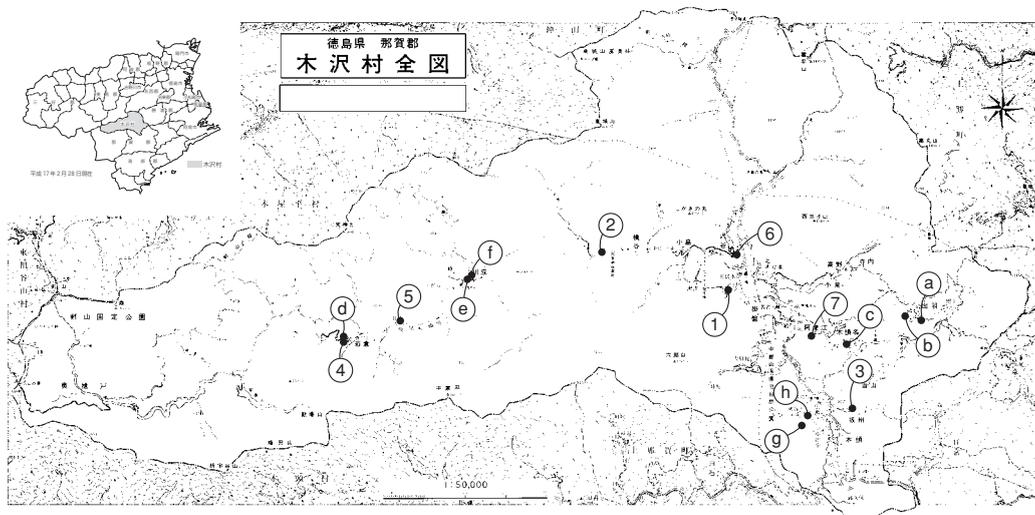
酒巻 芳保*¹ 井河 明子*² 植村 成樹*³ 喜多 順三*⁴ 桜木 晋一*⁵ 高田 哲生*⁶
 田村 栄二*⁷ 根岸 徳美*³ 林 茂樹*⁸ 板東 毅*⁹

1. はじめに

木沢村は剣山の東山麓那賀川支流の坂州木頭川流域に位置し、標高は海拔230m～1,950mと大きな高低差がある。村内で最も低い木頭集落が海拔230m、最も高いところに位置する岩倉集落が800m前後である。山林の占める割合は97%と高く、地形は急峻で平地部は坂州・木頭辺りの坂州木頭川沿いにわずかに存在する。

我々民家班はここ数年、その地域の特徴を色濃く持つであろう茅葺き民家に焦点を当て、悉皆調査を試みてきた。しかし、木沢村においては茅葺きの屋根をさすくみ又首組ごと取り外し、切り妻屋根もしくは入母屋屋根に改造すること（以下これを「小屋下げ」と呼ぶ）が多く行われていることと、一部の地域にお

いては古くからソギ板や杉皮葺きの屋根で作られていたことなどが事前の調査でわかってきた。また、昭和48年に行われた民家緊急調査時に、木沢村では13軒の詳細調査が行われており、その変遷についても研究されている。これらのことから、本調査では悉皆調査は行わず、過去の調査資料と結団式時の聞き取り調査から古い形式を持つであろう民家を調査対象として選定することとした。また、村内ほぼ全域の概観調査を行い、主だった集落では聞き取り調査を行った。そして、選定した民家を詳細調査し、過去の調査資料や県内他地域の民家と比較することで、村内民家の特徴をより明らかにできるように努めた。本調査では、7軒の民家で詳細な実測調査を行い、8軒の民家で聞き取り調査と簡単な実測調査をすることができた（図1）。



①～⑦：
詳細調査民家

a～h：
主にヒアリング調査民家

図1 調査民家位置図

*1 徳島県建築士会 *2 戸塚元雄建築設計事務所 *3 UN建築研究所 *4 空間計画研究所 *5 桜木建築事務所
 *6 高田建築設計 *7 穴吹カレッジ *8 林建築事務所 *9 (有)佐藤建築企画設計

2. 調査民家の概要一覧表 (図2)

①～⑦：詳細調査民家 ⑧～⑩：主にヒアリング調査民家

記号	名称	住所	建築年代	間取り	屋根 (当初) - 現在	小屋下げ	架構	柱 (mm)	太い柱 (mm)	備考
1	西谷家	掛盤	安政6 (1859) 棟札確認	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和35年 (又首穴有り)	デンジバリ (鴨居付)、 コキバシラ	130×135	175×240	板壁と土壁の併用
2	田村家	横谷	寛延年間 (1748～1751) 棟札確認	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和30年頃 (又首穴有り)	デンジバリ (ハマグリ チョウナ)、コキバシラ	135角	なし	板壁、前便所有り
3	藤家	坂州	文政8年 (1825) 棟札確認	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和34年 (又首穴有り)	デンジバリ (鴨居付) ※改造時に撤去	133角	160×190	
4	西村家	岩倉	19世紀中頃 〔阿波の民家〕	中ネマ 三間取り	(ソギ板葺き石置き)〔阿波の 民家に写真有り〕- 鉄板葺き	(又首穴なし)	二重梁 (チョウナ)	—	なし	板壁、前便所の跡、 「蛇腹」
5	小森家 倉庫	岩倉 (飛地)	不明	横二間取 り	(不明) - 鉄板葺き	(又首穴なし)	二重梁	-	なし	板壁
6	井元家	沢谷	文化6 (1806)棟札確認 ※享保12 (1727)	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和30年頃	—	130角	170×210	板壁と土壁の併用、 風除けの石積み
7	岸野家	阿津江	不明	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和30年頃 (小屋下げし2階建に)	二重梁	135角	160*180	板壁と土壁の併用
a	福永家	出羽	不明	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和31年 (小屋下げし2階建に)	—	—	—	
b	中丸家	出羽	19世紀中頃(聞き取り)	中ネマ 三間取り	(草葺き) - 鉄板葺き	昭和38年 (小屋下げし2階建に)	—	135角 (カシ)	150×210 (オオビ)	土壁
c	植田家	木頭名	不明	食い違い 四間取り	(草葺き) - 草葺き鉄板巻き	—	—	—	—	
d	後藤家	岩倉	明治初め (聞き取り)	四間取り	(ソギ板葺き石置き) - 鉄板葺き	—	—	—	—	昔、前便所有り
e	紙本家	川成	昭和24年 (聞き取り)	横三間取 り	(ソギ板葺き石置き) - 瓦葺き	—	—	—	—	
f	小森家	川成	明治35年 (聞き取り)	変形六間 取り	(杉皮葺き石置き) - 鉄板葺き	—	—	—	—	玄関脇に便所有り
g	後田家	坂州	昭和12年 (聞き取り)	六間取り	(杉皮葺き石置き) - 瓦葺き	—	—	—	—	ゲンカン構え
h	道中家	坂州	明治30年以前 (聞き取り)	食い違い 四間取り	(草葺き) - 草葺き鉄板巻き	—	—	—	—	土壁

注) 表中の — は未確認

3. 詳細調査民家

1) 西谷 美智子家 掛盤

本家は坂州木頭川をまたぐ掛盤集落の西端、標高500m程の中腹に位置する民家。現在は空家となっている。屋号は「マトバ」。『木沢村誌』¹⁾によると西谷家は「安永八年(1779)、平島又太郎様御家来」と記されている。

主屋は北側斜面に北向きに配置され、主屋の西にユズベヤと呼ばれるユズの貯蔵庫と隠居屋跡が並ぶ(図3)。主屋の建築年は棟札により、安政6年(1859)と確認できた(図4・5)。江戸時代後期の建築である。元々は茅葺き屋根であったが、昭和35年頃、材料の茅が杉の植林により手に入らなくなり、その頃トタン葺きが流行っていたことから、草葺き屋根を小屋下げしてトタン葺きにしたとのことで、梁材の上端には又首の穴が残っている(図6)。

主屋の間取りは10帖の「オモテ」をもつ「右勝手中ネマ三間取り」で、昭和20年代に下屋部分を改造して玄関とした。外壁には土壁をつけ、内法位置から下は板張り、増築部分はささら小下見板張りとなっている。柱は杉で135mm×135mm、大黒柱はケヤキで175mm×240mmが使われている。

架構においては「オモテ」と「ナカノマ」の境の内法位置に「デンジバリ」と呼ばれる断面の大きな材が使

われ、「コキバシラ・オトシコミの構法」を用いている。



図4 主屋外観



図5 棟札



図6 又首の穴

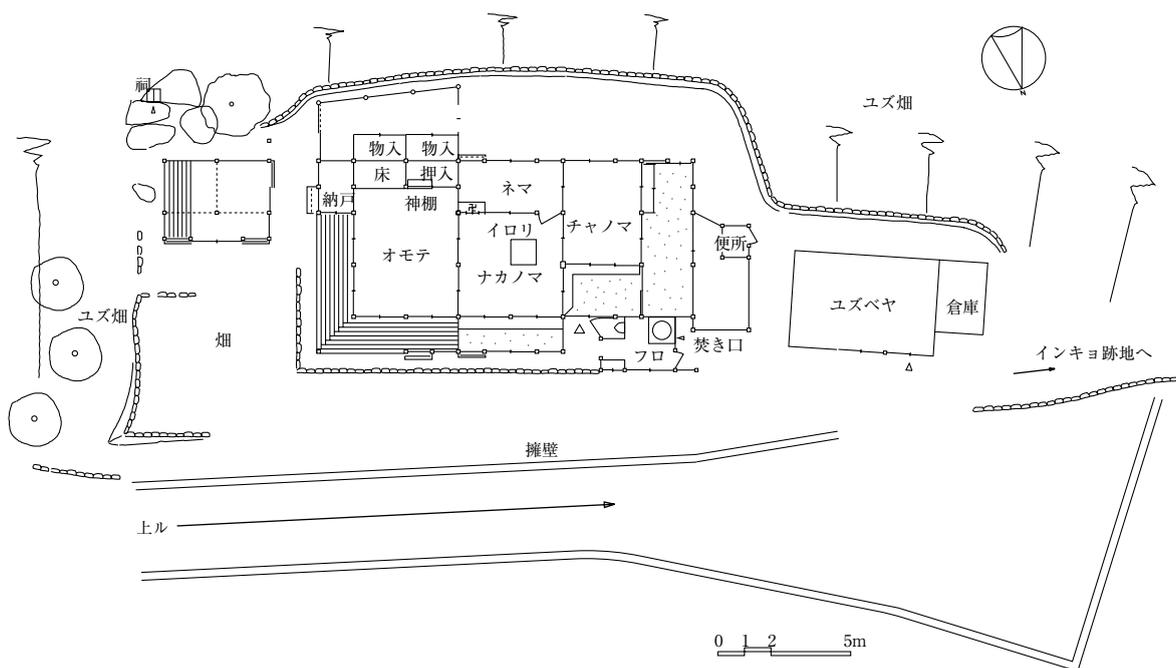


図3 配置・平面図

2) 田村 留五郎 家 横谷

当家は横谷を流れる坂州木頭川の北岸、県道から少し上がったところに位置する。勾配の急な斜面を切り盛りし、谷側に高い石垣を積んだ敷地で、東に沢を挟んで隠居屋、西に便所棟と納屋を配する（図7）。昭和49年の集中豪雨により土石流が発生し、主屋（図8）と隠居屋が分断された。また主屋の北側も被害を受けたため北側にはかなり改修の跡がみられる。主屋は寛延年間（1748～1751）の建築である（棟札により確認）。元々茅葺き屋根であったが昭和30年頃には既に小屋下げされていたとのことで、本調査でも梁上端に又首の穴が確認できた。

間取りは12.5帖の「オモテ」を持つ「右勝手中ネマ三間取り」であるが、「オモテ」の外側に便所がある。これは剣山地周辺部民家の特徴とされる「前便所」の形式と同様である。

大黒柱のような太い柱はなく、「オモテ」と「ナカノマ」を合わせた主体部分（4.5間×3間）の梁材は全て一本の通し材で構成されている。また、「オモテ」と「ナカノマ」境の内法位置にはハマグリチョウナはつりの「デンジバリ」があり、二本の柱はその「デンジバリ」を貫通して上屋梁を受けている「コキバシラ・オトシコミの構法」となっている（図9）。



図8 主屋全景（前便所が残る）



図9 「デンジバリ」と「コキバシラ」

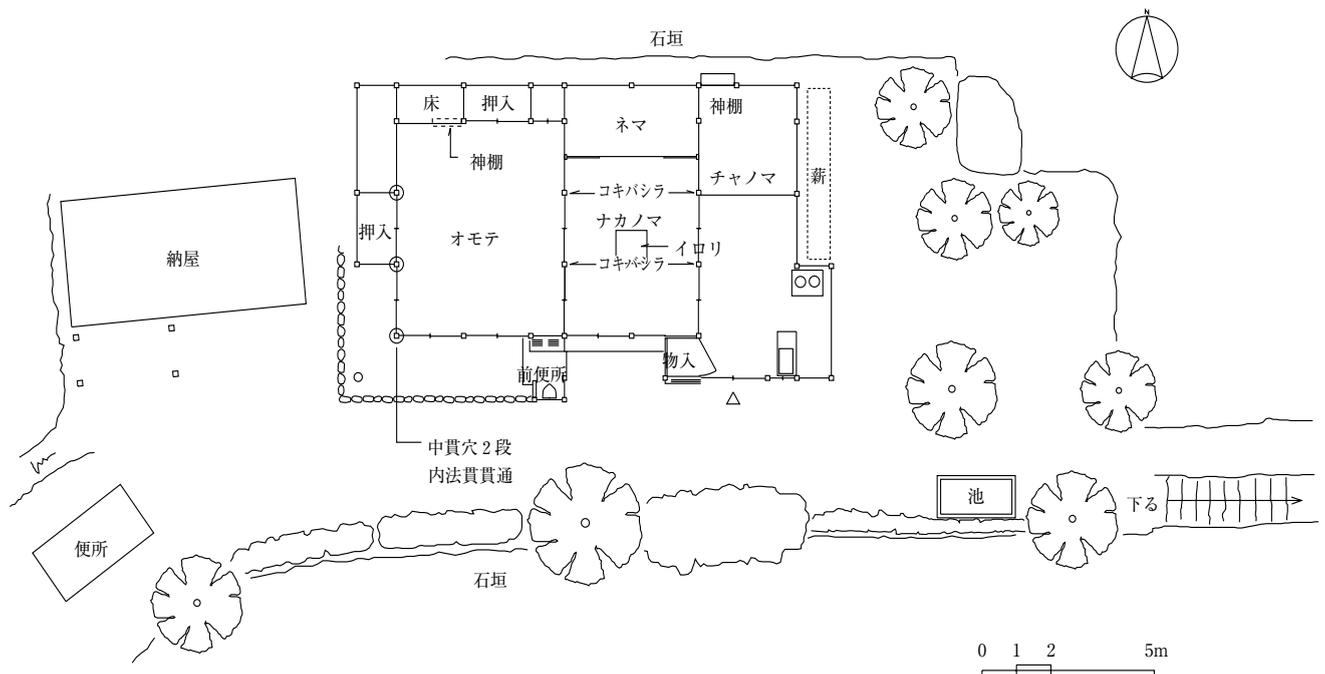


図7 配置・平面図

3) 蔭 カネヲ 家 坂州字向工

当家は寺谷の左岸、北面傾斜地にある。屋号は「オモヤ」。蔭家のムナギ（先祖の呼称）は、坂州のクサキリセンゾ（開拓者）であるという。隠居屋・主屋・納屋が並び建つ（図10）。古くは小屋の建つ下の石積のところにあったが、焼けて現地にあがる。急ぎ建てられた焼普請であった。当地は、台風のあたりが強いことから、建前時に家人が柱を挽き切って、家の高さを低くしたという。大黒柱は190mm×

160mm、その他の柱はおよそ133mm角の杉材である。今回の調査により棟札2札がみつき、建築は文政8年（1825）、小屋下げはカネヲさんの義弟による昭和34年と判る。カヤ場は高丸山にあった。

また、当家は昭和28年頃に酒巻芳保による調査が入り、当時のようすと合わせて今回の詳細調査により建築当初の中ネマ三間取りに遡ることができる（図11～14）。



図10 現在の主屋

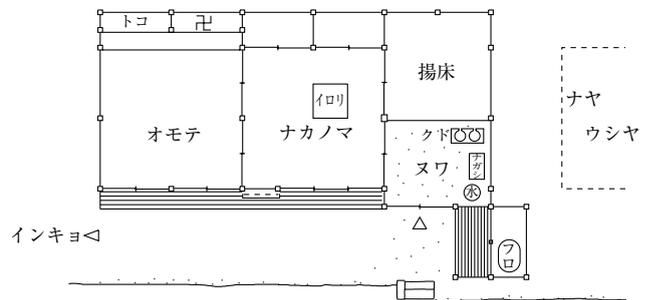


図12 昭和28年頃の平面図『民家帖』²⁾より

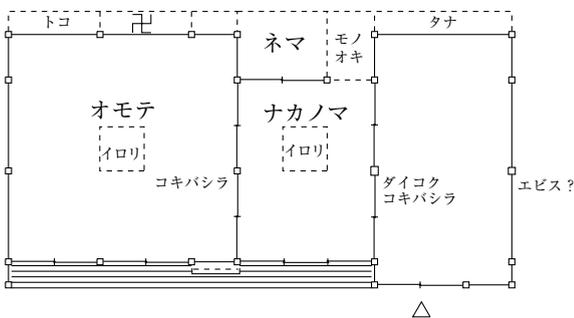


図11 文政8年（1825年）復元平面図

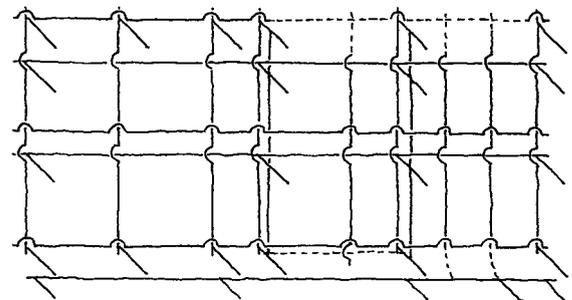


図14 架構図

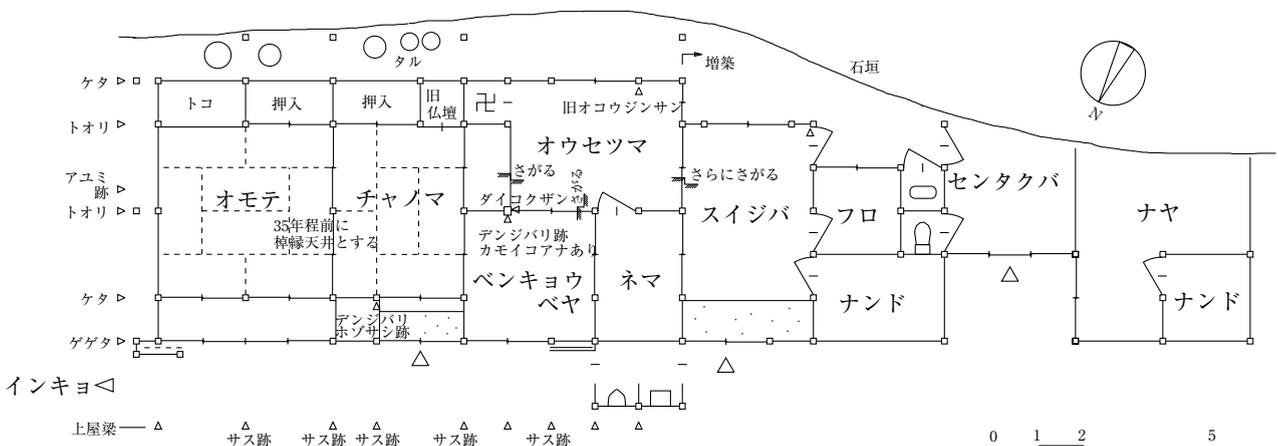


図13 現況平面図

4) 西村 トミエ 家 岩倉

現在空き家の当家は、木沢の一番奥、剣山に一番近い傾斜地にある岩倉集落の中央を貫く里道の中程にあり、敷地前面は石を積み造成している。街並みのように集積した集落の中にあるため敷地は狭くない。主屋は南東の谷側を向いており、別棟で風呂便所棟が主屋南西にある。主屋西に下屋を設けているが、他に付属屋はない。(図15・16)

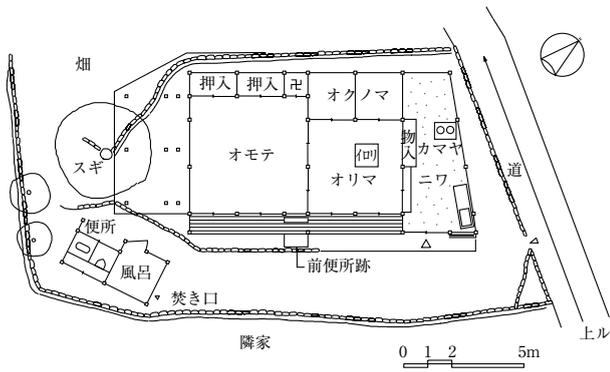


図15 配置図・平面図



図16 建物外観

主屋は間口5.5間、奥行き2.5間。建築年代は『阿波の民家』³⁾によると19世紀中頃と推察されている。平面形式は「中ネマ三間取り」であるが、「ニワ」は狭い敷地に合わせて台形になっている。「オリマ」には中央に囲炉裏がある(図17)。「オモテ」には仏壇があるが、床の間はなく押し入れが並ぶ。「オクノマ」(ネマ)は一坪2間に分割されている。また、「オモテ」前面には剣山周辺部に建つ民家の典型である「前便所」の痕跡が残されている(図18)。

壁は板で、良質の土や田が無いいため藁スサが得ら



図17 「オリマ」

れないことや竹が自生していなかったことなどの理由で、この地域に土壁は用いられなかったようである。

屋根は現在波トタンで葺かれているが、昭和51年時点でソギ板葺き石置き屋根であった。『木沢村誌』によると岩倉地区に茅葺き屋根の民家はなく、ソギ板葺き石置き屋根が一般的であったようだ。

小屋組は井桁に組み、梁は丑梁と桁梁を挟み二重に掛けるなどしっかりと固めている(図19~21)。土塗り壁を用いないで軸組みを固めるためではないかと推察される。また、「デンジバリ」はなく、「オモテ」の四周に長押を廻している。



図19 梁組

外壁はささら子下見で西妻側は「蛇腹(躰建て)^{じゃばらいらかだ}」がある。東側妻は波トタン張りで蛇腹は無いが、元あったものを改修したものである。

「ニワ」と「オリマ」の間仕切り上部は、鴨居と梁の間に斜材(筋違)が設けられている。当初からのものか、後に加えられたものか定かではない。ま

た、この間仕切り上部に蛇腹の痕跡や梁に垂木彫りがあることから、当初「ニワ」部分の屋根は、東に向かったの下屋であったものを大屋根に改造したことがわかる。また、床組には「虹梁」と呼ばれる大断面の丸太材を用いている（図22）。



図18 「前便所」跡

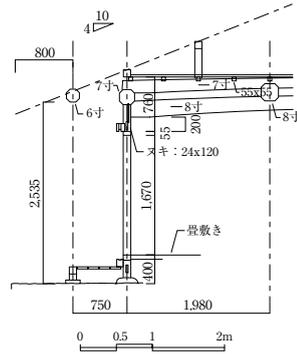


図20 矩計図

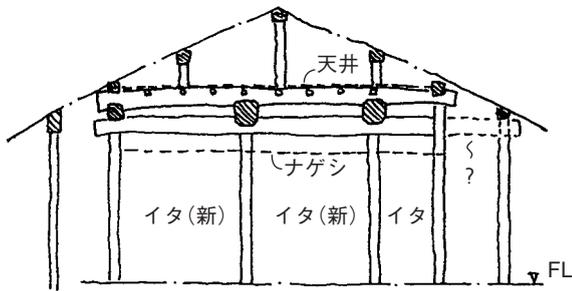


図21 「二重梁」軸組図



図22 床組一「虹梁」

5) 小森竹造家倉庫 岩倉

この建物は岩倉集落へ上がる手前、日浦橋の北側に位置する。現在は川成に住む小森氏が所有しており、倉庫として利用している。南側の谷に向けて建てられ、東に増築と思われる土間部分、少し離れて風呂を構えている（図23）。

間取りは12.5帖の「オモテ」をもつ、「右勝手横二間取り」である（図24）。天井は張られておらず、架構の様子がよくわかる。棟木や母屋、垂木など小屋組の材料が柱、梁材と同時期のものであることと、梁上部に叉首の穴が無いことから建築当初から茅葺きではなく、杉皮かもしくはソギ板葺きの切り妻屋根であったと推測できる。また、架構は、梁間方向の主要なところに二重梁が組まれ、構造を固めている。壁は土壁をつけず、前述の西村家と同じく板張りである。



図23 全景

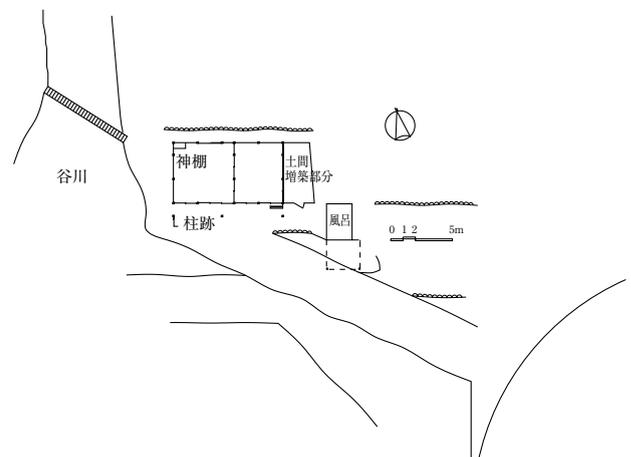


図24 平面・配置図

6) 井元 彦二家 沢谷

坂州木頭川の支流、沢谷川に沿って走る国道193号線より少し上った上沢谷地区の東面傾斜地に当家はある。南北に長い敷地で、東面する主屋以外にユズゴヤ、便所、納屋、牛屋等の付属屋が並ぶ(図25・26)。『阿波の民家』の調査対象民家で、現在は居住されていない。家柄としては祖谷出身で元々庄屋の斎城(サイキ)家からの分家で、石本・卯城(ウシロ)家・埜中(ノナカ)家は分家当時の株分である。当主彦二氏は20代目にあたる。当主の父林吾(リンゴ)は大工・土建業をしており、屋敷の北側の便所や東の縁側は父が造った。屋敷の北に松の大木があったが、枯れたため4年前に切ったという。主屋の北側で張り出した石積みは風除けのためといわれる。

主屋には、享保12年(1727)と文化6年(1809)の2枚の棟札が残されている(図27)。『阿波の民家』には文化3年(1806)の建設とあるが、文化6年のものと推察される。間取りは基本的に「左勝手中ネマ三間取り」で、北の「オモテ」や「ヨンジョウノマ」は後からの増築と考えられる。『阿波の民家』の間取りと比較して、2ヶ所の変更が加えられている。すなわち4畳の「ネマ」が2畳ずつに間仕切られたこと、「ナカノマ」が間仕切られて「チャノマ」と「ヨンジョウノマ」をつなぐ廊下ができている。畳のモジュールは6尺3寸×3尺1寸5分、柱は130mm角、大黒柱は210mm×170mm。また、架構において「デンジバリ」はない。かつては茅葺きで、奥さんによれば50年前に小屋下げされ、現在は切妻屋根のトタン葺きである。もともとは南の土間から

出入りをしたという。

土間の東の小便器は昔からのもので、「オモテ」の北側には、大正年間に縁側があった。昭和12・13年頃、「オモテ」を医者に貸していたという。



図25 主屋



図27 2枚の棟札

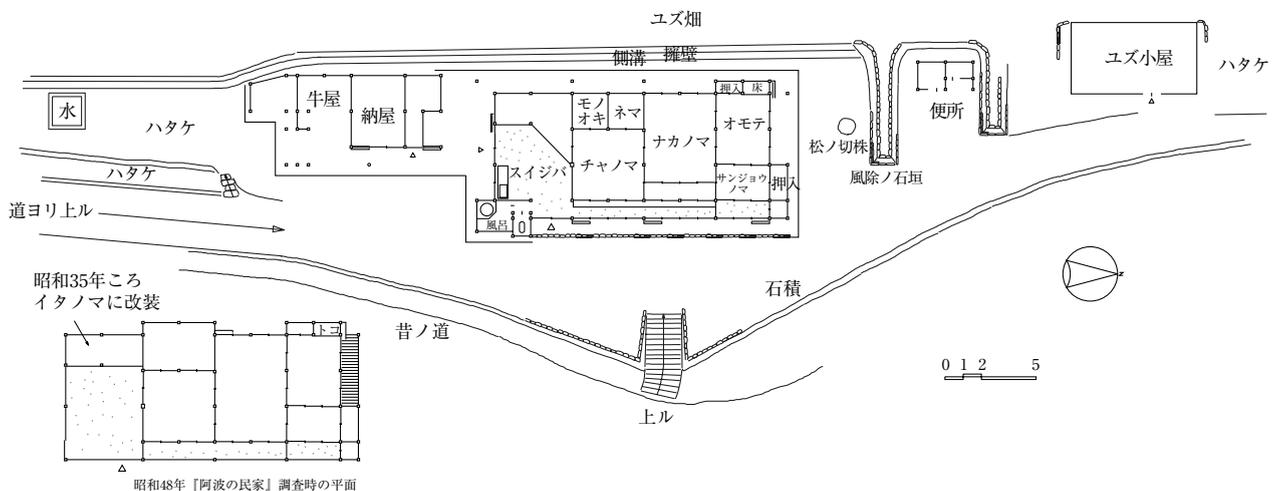


図26 配置・平面図

7) 岸野 傳家 阿津江

当家は阿津江集落の南東部に位置する。約65年前までは、主屋と隠居屋の間でコウゾを炊き、主に和紙（障子紙）を漉いていた。敷地は比較的緩やかな斜面にある。主屋は東向きに建てられ、北に昔の紙漉きの釜を据えた作業舎と隠居屋、その少し南に納屋を配する（図28・29）。また作業舎から西に少し上がったところに500年以上になるといわれる板碑がある。

間取りは、8帖の「オモテ」を持つ右勝手「中ネマ三間取り」で、大黒柱は「ニワ」と「ナカノマ」の境にあり、大きさは160mm×180mmである。2階部分は、第2次世界大戦後まもなく、昭和20年代の増築である。また梁間方向の間仕切り通りには、二重梁が確認できた。壁は土塗壁で小舞竹は丸竹を用いている。



図28 屋敷全景

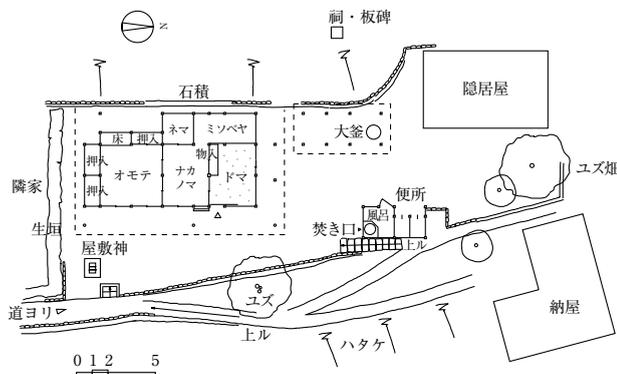


図29 配置・平面図

8) その他の調査民家

次に、ヒアリング調査及び簡単な実測調査により確認した民家について、以下の表に示すこととする。

所有者	福永 智恵子
住 所	出羽
建築年代	不明
間取り	中ネマ三間取り（現在2階有り）
屋根（当初）- 現在	（草葺き）- 鉄板葺き

床		ネマ (3)	モノ オキ (3)	ザシキ
オモテ (12)		ナカノマ (8)		ニワ
		▲		

昭和20年頃の間取り
昭和31年に小屋下げし、2階建てにした。

所有者	中丸 治美
住 所	出羽
建築年代	1864年頃（聞き取り）
間取り	中ネマ三間取り（現在2階有り）
屋根（当初）- 現在	（草葺き）- 鉄板葺き

		ネマ	床
上間(昔)	仏	ナカノマ (8)	オモテ (10)
増築部分	増築部分	広縁	広縁
▲ ▲			

昭和38年に小屋下げし、2階建てにした。
太い柱：オオビ、他の柱：カシ

所有者	植田 孝雄
住 所	木頭名
建築年代	不明
間取り	食い違い四間取り
屋根（当初）- 現在	（草葺き）- 草葺き鉄板葺き

床		
オモテノオク (6)	ネマ	イマ
オモテノマエ (6)	ナカノマ (8)	ドマ
▲ 便所 ▲		

所有者	後藤 重信
住 所	岩倉
建築年代	明治初め（聞き取り）
間取り	四間取り
屋根（当初）-現在	（ソギ板葺き石置き） - 瓦葺き

以前は前便所があった

所有者	後田 傅一
住 所	坂州字寒谷
建築年代	昭和12年（聞き取り）
間取り	六間取り
屋根（当初）-現在	（杉皮葺き石置き） - 瓦葺き

昭和30年頃、屋根を鉄板葺きに改修

所有者	紙本 国一
住 所	川成
建築年代	昭和24年（聞き取り）
間取り	横三間取り
屋根（当初）-現在	（ソギ板葺き石置き） - 瓦葺き

所有者	道中 幸
住 所	坂州字寒谷
建築年代	明治30年以前（聞き取り）
間取り	食違い・四間取り
屋根（当初）-現在	（茅葺き） - 茅葺き鉄板巻き

所有者	小森 竹造
住 所	川成
建築年代	明治35年（聞き取り）
間取り	変形六間取り
屋根（当初）-現在	（杉皮葺き石置き） - 鉄板葺き

昭和30年頃、屋根を鉄板葺きに改修

壁は土壁を用いている。

4. 木沢村民家の概要

以下、本調査で明らかになった木沢村民家の概要について述べることにする。

1) 屋敷構え

坂州・木頭集落の坂州木頭川沿いにある平地部を除き、ほとんどの民家が、山腹の傾斜地を造成し、等高線に沿った細長い敷地に建てられている。他の県内山間部の民家と同様に主屋と納屋、場合によっては隠居屋などを、敷地に沿って一列に配置し、谷側に庭を確保する形態が一般的である。

2) 間取りと建築年代

昭和48年に行われた民家緊急調査の報告書『阿波の民家』によると、木沢村において、元禄6年(1693)～幕末・明治期までの13軒の民家を詳細調査しており、その変遷が研究されている。木沢村では18世紀を通じて「横二間取り」と「中ネマ三間取り」が一般的で、19世紀になって初めて「四間取り」系の間取りが現れると報告されている。

今回の詳細調査民家の内、棟札により建築年代が特定できた民家4軒の中で、最も古い田村家が寛延年間(1748～1751)、最も新しい西谷家が安政6年(1859)であった。間取りについては4軒全ての民家が「中ネマ三間取り」である。また、「四間取り」系の間取りが確認できたのは明治期以降の比較的新しい民家だけであった。間取りと建築年代については過去の調査を裏付ける結果となった。

3) 屋根

木沢村内では元々茅葺き寄せ棟屋根が主流であったが、昭和30年頃に小屋下げし、ソギ板、杉皮もしくは鉄板葺きの切り妻(あるいは入母屋)屋根に改造されたものが多い。今回の詳細調査でも、4軒において梁の上部に古い叉首の穴を確認することができた。ただ、岩倉集落の調査民家2軒においては叉首の穴はなく、『木沢村誌』の「岩倉の家々が、切り妻造りで板葺きの石置き屋根であった」という記述と符合する。岩倉集落での聞き取り調査によると、ソギと呼ばれる厚さ5分ほどの割板(ナラなど)で屋根を葺き、その上に石を置いていたとのことであった。しかし、残念ながら現存している建物はなかった。ちなみに、ソギ板葺きについては『木沢村誌』

の部落誌編に詳しく記述がある。

4) 架構

(1) 「デンジバリ」と「二重梁」

今回の詳細調査民家のうち、田村家、蔭家、西谷家では「デンジバリ」と思われる矩形断面の大きな梁が「ナカノマ」と「オモテ」の境、内法位置に用いられていた(図30・31)。ただ、田村家においては梁に直接建具溝をついているのに対して、蔭家と西谷家では梁下端に鴨居を付けている。どちらも構造強度の向上という意味では同じだと考えられるが、その点で違いがみられる。



図30 「デンジバリ」と「コキバシラ」(田村家)

また、西村家、岸野家、小森家倉庫については「二重梁」が用いられていた。これは、梁間方向の間仕切りのある位置で桁行き梁を二本の梁で上下に挟んで構造を固める構法で、時代としては「デンジバリ」の後に現れるとされている。今回の調査においてもその傾向はみられた。

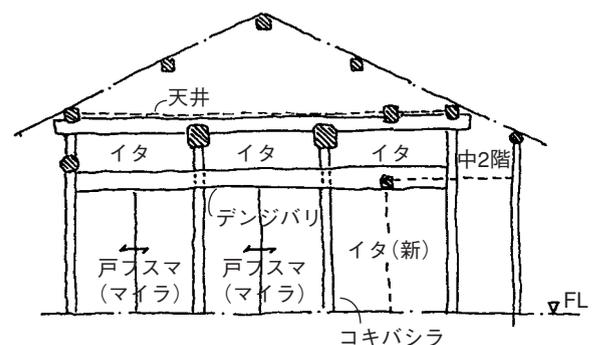


図31 「デンジバリ」軸組図(田村家)

(2) 「コキバシラ・オトシコミの構法」

さらに、田村家においては、「デンジバリ」下の柱2本は上部を細くし(コキオトシ)、「デンジバリ」を貫通し、上屋梁を支える「コキバシラ・オトシコミの構法」となっている。この構法は、一宇村の宝暦3年(1753)築の民家にも用いられており、東祖谷山村落合集落においては、安永9年(1780)築の民家で用いられていることが最近わかった。また半田町でも、幕末期の一部の民家でみられることから、この構法は剣山周辺部の民家において18世紀中頃以前から用いられていたと考えられる。

「デンジバリ」については、前述の『阿波の民家』でも木沢村民家の特徴として触れられているが「コキバシラ・オトシコミの構法」については触れられていない。今回、木沢村においてこの構法が確認でき、建築年代が特定できたことは非常に意義深い。

5) 板壁

当村の民家には、土壁をつけず板壁だけのもの(田村家、西村家、小森家倉庫)や、ほとんど板壁であるが小壁や「オモテ」だけ土壁にしているもの(井元家、西谷家、岸野家)が多い。今回の調査では、はっきりとした理由はわからなかったが、土壁に必要な良質な土、藁スサ、竹などの材料が手に入りやすかったことと、当村では古くから板材を生産しており、比較的容易に板材が入手できたためではないかと思われる。

6) 前便所

古くは「オモテ」の前に便所を配置する「前便所」の形式を持つ民家があったことがわかった。山間部の民家では玄関脇に小便所を配するのは一般的であるが、「オモテ」の前に便所を配するのは剣山周辺部に建つ民家の特徴とされている。聞き取り調査によると、岩倉、川成、横谷集落には同様の形式の民家があったとのことだが、本調査で現存するものが確認できたのは横谷の田村家1軒で、岩倉集落の西村家には前便所の痕跡と思われる垂木彫、根太彫が確認できた。なお、『阿波の民家』の掲載写真では「前便所」が確認できる。

7) 強風対策

岩倉・川成集落では風が強く、切り妻屋根の妻側に風雨の侵入、もしくは屋根が飛ばされるのを防ぐ

ために、外壁を破風下まで斜めに張り上げた「蛇腹」と呼ばれる工夫がされていた(図32)。これは台風が多い県南地域にみられる「葺立て」と同様の工夫である。また、軒高を低く抑えているのも強風対策のひとつであろう。さらに、沢谷の井元家にみられたように風除けの石垣を積む民家もみられたが、これは同じ那賀川流域の相生町でも確認している。



図32 岩倉の「蛇腹」

5. おわりに

本調査で田村家の詳細調査により、建築年代が判明したことは大変大きな収穫であった。改造も少なく、間取り、架構、屋根の変遷など、木沢村古民家を代表しうる建物といえる。昭和48年の民家緊急調査で詳細調査の行われた13軒の民家のうち、現存が確認できた岡本家、井元家、西村家とともに、本村のみならず徳島県山間部民家の特徴を知る上できわめて重要な位置にある。

最後になりましたが、昨年の集中豪雨で心身共に多大な被害を受けておられながら、進んで調査にご協力頂いた村民のみなさまに、心から感謝の意を表したいと思います。

文 献

- 1) 木沢村誌編纂委員会編(1976):『木沢村誌』。
- 2) 藤田周忠著(1955):『民家帖』。
- 3) 奈良国立文化財研究所・徳島県教育委員会編(1976)『阿波の民家』。
- 4) 酒巻芳保著(2000):『渚の砂に残る足あと』。
- 5) すまいとくらし編集委員会編(1998):『阿波の民俗3』すまいとくらし。
- 6) 東祖谷山村伝統的建造物群保存対策調査委員会編(2003):『東祖谷落合 伝統的建造物群保存対策調査報告書』。